

## 万次郎人生の概観⑦

### 「万次郎・伝蔵・五右衛門の故郷への帰還」

#### (1)長崎を出発し、土佐へ

長崎奉行牧志摩守から連絡を受けた土佐藩では、13人の役人の派遣を決定した。これに加えて、宇佐浦組頭と中浜浦住人と総次、医師2名の総勢17人の長崎派遣団が結成された。医師2人は、どのような経緯からかは不明であるが、自費での参加であった。

万次郎を直接取り調べた長崎奉行牧志摩守は、万次郎の英邁さに「国家の用となるべきものなり」と絶賛して公儀に報告書を提出した。これが後に万次郎が江戸に召喚される基になる。

土佐藩からの派遣団が長崎に到着し、1852年(嘉永五年)6月25日に万次郎ら3人を伴い、土佐に向かった。門司・下関を経て海路へ、瀬戸内海を2日間航海し、三津浜へ着岸した。ここから陸路で松山・久万を経て高知城下へ7月11日に到着した。琉球上陸から実に1年7か月を要した。

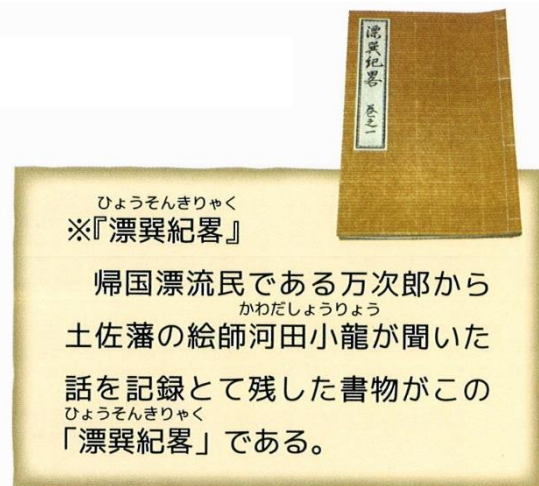
#### (2)土佐藩での聞き取り調査

ちょうど、幕府の鎖国政策の動揺期であり、インドや清国などのアジア各国が欧米列強から植民地化支配を受けている実情から、世界情勢を知るうえで万次郎らが領国内に帰還したことを土佐藩主山内豊信は歓迎した。

実質的には、長崎奉行所の吟味で万次郎らの処分は、無罪放免となっており、土佐藩での取り調べは、米国をはじめとする海外情報を万次郎から提供してもらうという要素が強かった。

藩主山内豊信の命により、大目付吉田東洋の配下・吉田正誉が万次郎から種々聞き取りを行った。その報告書が『漂客談奇』である。1談は漂流から帰国までのこと、2～3談は米国事情の3談で構成された。また、土佐藩絵師・河田小龍は藩主豊信の命により、万次郎らに海外事情を聴き、これらに彩色挿絵を入れた『漂異紀畧』を著した。

高知城下の万次郎は、藩主豊信や知識人たちの屋敷に呼ばれて食事に招待を受けたり、贈物をももらったりして歓迎された。ここで聴き取られた『漂客談奇』や『漂異紀畧』などの史料は書写され、増刷されて、藩士などの教育に活かされた。万次郎ら3人は、藩主から今後、漁業に従事することを禁じられた。その代わりに藩から1人1人扶持が生涯受けられることになった。



### (3)宇佐浦・中浜浦へのそれぞれの帰郷 家族の待つ故郷へ

伝蔵と五衛門の故郷「宇佐浦」は高知城下に近く、20kmほど西の海浜集落である。宇佐浦に着くと伝蔵と五右衛門の実家は既に無くなっていた。その晩は従弟の家に宿泊した。万次郎もそこに泊めてもらった。親戚や知人が次々と集まり、晩に祝宴が催された。重助の病死は悲しかったが、兄弟2人が無事に帰還できたことが親族にとってはなによりも嬉しかった。伝蔵の親族たちは3人から聞く海外事情に目を丸くして聞き入っていた。

翌朝、万次郎は宇佐浦を発ち母の待つ中浜浦へ家路を急いだ。中浜浦には宇佐浦から陸路4日かかった。峠から中浜の谷筋を見て、懐かしい郷愁の思いがふつふつと湧いてきた。1852年10月5日のことである。琉球上陸から実に1年10か月余りを要していた。万次郎が生きていることは母の耳にも届いていた。姉のせき・志ん・兄時蔵・妹梅も皆健在であった。集落には、話題の人・万次郎を一目見ようと人垣ができたことだろう。ここで万次郎と母の面会の場面を描写することは控えたい。史実に基づく記述であり、小説や物語ではないからだ。ただ、万次郎にとっても、母にとっても、忘れ得ぬ感動の一コマであったことは間違いない。(続く)



※本号1枚目と2枚目の挿絵は、『郷土の先人 日本のとびらを拓いたひと ジョン万次郎』土佐清水市教育委員会(2020年)21頁と22頁から転載。22頁挿絵は、依岡みどりさんが描いたものである。

#### 引用・参考文献

- ・中濱博『中濱万次郎―「アメリカ」を初めて伝えた日本人―』富山房インターナショナル、2005年。

#### 【編集後記】

台風6号が日本列島を襲い、沖縄～南西諸島～九州に大きな被害をもたらしました。また7号はお盆時期帰省などの日本列島に交通などに悪影響を与えると予想されています。気候が高温多湿でコロナとともに、冷房などによる夏風邪も流行していると聞きます。水分と休養をしっかりと取り、健康にご留意ください。(田村)